

世界の海へ、飽くなき挑戦 一プロセーラー 伊藝徳雄

インタビュアー・片山清宏 文・片山久美



沖縄の思い出

1972年5月15日、沖縄返還の日。その3日後に伊藝徳雄は生まれた。伊藝のルーツは父母の故郷である沖縄にある。

沖縄といえば宮古の海だ。コバルトブルーの竜宮城の海当時は港内でも潜ると生きた珊瑚礁があった。

「昼間は暑すぎて地元の人は海には行かないですね。夕方 18時くらいになると近所の親戚の子どもや従兄弟のお兄 ちゃんたちと釣りをして遊んでいました」。

父は沖縄県金武町(きんちょう)、母は離島の宮古島で生まれた。5人兄弟の次男であった父は、母と結婚後、仕事を求め沖縄を出て親戚のいる川崎にやってきた。それから50年故郷を離れ、川崎に居住することになった。伊藝もそこで生まれ、小中高は川崎で過ごした。

しかし、両親は川崎移住後も事あるごとに子どもだった 伊藝を沖縄に連れていった。沖縄県の日本本土復帰記念 事業として行われた沖縄海洋国際博覧会に連れて行って もらったのも良い思い出の一つだ。

「自分のルーツが沖縄にあるということを両親は私に覚えておいて欲しかったんだと思います」

父への反発、ヨットとの出会い

「川崎で父は電機設備関係の会社を立ち上げ、家には常に職場の人が出入りしていました。お正月や毎月の給料日には職人さん違が家に来て、母が給料を手渡し、沖縄料理をルを振舞った。時には三線(サンシン・沖縄三味線)と陽気な歌が聞こえてきた。そういった光景が物心つく頃から当たり前にありました」

伊藝は、中学高校時代、バスケットボールに熱中し、高校では県ベスト16まで進出。体を動かすのが好きだったので、体育関係のインストラクターの仕事を目指そうと考えていた。しかし、周囲の親戚や友人からは当たり前のように「卒業したら父の仕事を継ぐんだろ」と言われていた。「世の中はバブルに沸いていました。時代もよかったし、父

世の中はバブルに沸いていました。時代もよかったし、父も大きな施設作業を受注していました。でも、当たり前のように父の仕事を継ぐのは絶対嫌だと。当時は明確な『これがしたい』という思いよりは、周囲の人の『継ぐのが当たり前』という意識への反発心がありました」

敷かれたレールへの反発。その先にヨットとの出会いがあった。

高校卒業後、YMCA海洋 科学専門学校マリンスポーツ科へ入学。その頃、伊 藝はトライアスロンに夢中になっていた。

「最初はバスケ引退の喪 失感を埋めるために始め たんですが、やり始めると のめり込むタイプで(笑)。



当時はテレビで『アイアンマン』が放送されていて、トライアスロンがメディアに取り上げられ始めた頃でした。ほぼプールにいるか、自転車に乗っているか、走っているかという生活でした」

授業で乗ったヨットの最初の印象は「気持ち悪い」だった。

「初めて乗った場所は三浦半島小網代湾のシーボニアヨットクラブ。カヌーのように身体を一生懸命動かせば前に進むスポーツなら分かりやすいですけど、正直ヨットは『とにかくよく分からなかった』。今でこそ、風が見えるという感覚とか、風の色とか匂いとか分かりますが、当時はなんのことやらさっぱりでしたね(笑)」

YMCA卒業後、伊藝は、独立して事業を経営している父親の影響もあってか、会社に勤めるという気は起きなかった。そんな時、手にした一冊の雑誌があった。ここから、伊藝の人生は、ヨットへ舵を大きく切っていった。

生まれて初めての挫折

「たいていのスポーツは一通りできましたが、ヨットだけはまだよく分からないという思いがありました。そんなとき月刊『KAZI(舵)』という雑誌で、日本一周する船のクルーの募集記事を見つけたんです。日本一周しているうちにヨットも上手くなるだろうと、エイッ!と飛び込んじゃったんですね」

早速、募集記事の情報を頼りに九州の博多まで行き、日本一周希望のオーナーさんのお宅に泊まり込み、練習を始めた。まずは博多から沖縄を目指しての旅。九州の島々をめぐりのんびり1か月かけて奄美へ到着。そこから沖縄までは24時間、300キロ弱、この期間中最も長い航路だった。

しかし、結果は…

「海が時化て遭難しかけたんです。今思えばその時、知識や経験、全てが未熟で他にも自力航行の方法はあったと思うのですが、当時は本当に何もできず恐怖だけを感じ

ました。最終的には海上保安庁にレスキューされました。 港に曳航されるまで恐怖のなか過ごしました」

この経験でこのままでは思う描くセーリングへの扉は 開かれないと決断。悩んだ末、半ば逃げるようなかたちで 船を降りた。約1ヶ月半で航海終了。

「素晴らしい経験と良い出も沢山合っただけに心苦しい 思い出で、今でも時々思い出します」

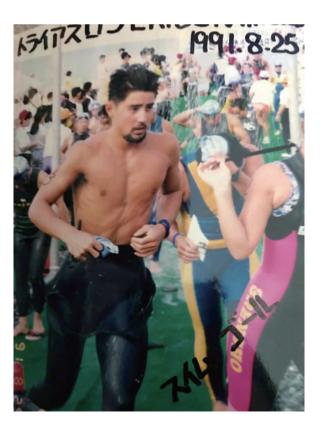
生まれて初めての挫折だった。

伊藝はその後、友人の紹介でヨットやクルーザーの輸入販売を行う「ファーストマリン株式会社」でアルバイトとして働いた。

「当時兄貴分として教えてくれた人が沖縄出身で、かわいがってもらいました。三浦から沖縄までヨットを運んだり、ヨットを組み立てたり、全部その人から教わりました」

レースチームにも所属し目標ができ練習にも熱が入る。 11人乗りの船の一員として伊藝も鳥羽レースに参加した。 普段は楽しく人の良いクルーたちが、時化た海上で、鮮や かなチームワークで何度も難関を乗り切る。厳しい時間が 過ぎると、一転してまたやんちゃなおじさんたちに戻る。 「自分は真っ暗な海で怖くて怯えて船酔い状態なのに、先 輩たちは大時化の中、危険が去って落ち着き始めたら、げ らげら笑いながらみんなでビールを飲んでいるんです」

伊藝は、その独特の空気感に圧倒され、そして魅了された。



ニュージーランドへ

そんな生活を1年半過ごした頃、50ftのレース艇を日本からニュージーランドまで回航する話の誘いを受けた。1ヶ月以上の海上での生活は容易ではないことは分かっていたが、海を渡って外国に行くということだけで興奮した。特に先を見越したわけではない。23歳になる手前の春、就職もせずに伊藝はニュージーランド行きのヨットへ飛び乗った。

その思い切りの良さが伊藝らしい。

しかし、海は容赦無く時化、想像した以上にニュージーランドまでの航海は長く辛いものとなったが、なんとか無事に到着。その後、ビザが切れるまでの3ヶ月、セーリング先進国の風を目一杯受け、「NZLセーリングスタイル」という新しい世界を経験した。

「ニュージーランドは、生活のベースにヨットがある町でした」

週末・平日問わずレースが開催される。オークランドでカフェを経営しているヨットのオーナー宅になぜか居候が決まり、夏のオークランドでの3か月の生活がスタート。ヨットレースに誘ってもらい仲間もでき、レースや、毎夜行われるレース後の飲み会で親交を深めていった。

「ニュージーランドでは、地域ごとにヨットクラブがあって、 週末になると地域のクラブチームが一堂に会してレース を競うんです」

生活の中にセーリングが自然に寄り添っている文化を 目の当たりにして新たな思いを抱き帰国をすることにな る。

3ヶ月のヨット留学を経て伊藝は帰国後、ドイル・フレーザー・ジャパンの長谷川社長にお世話になることに。20代の前半を三浦半島の油壺で、アルバイトとセーリングー色で3年を過ごした。

「可能性があると思えばどこにでも行ってセーラーに会い、経験を積んでいくうちに自信がついていきました」

合格率 0.6 4%の狭き門

アメリカズ・カップーー。オリンピックメダリストら多数のトップセーラーが乗り組む、ヨットレース最高峰の国際レースである。別名「海のF1」。伊藝の次なる挑戦は世界最高峰の「アメリカズ・カップ」へのチャレンジだった。

1997年夏、「アメリカズ・カップ・日本チャレンジ2000」クルーセレクションを受験するため、愛知県蒲郡市にあるベースキャンプに向かった。集まった受験者は540名。そのうち「アメリカズ・カップ」を目指すクルーになることを許されたのはたった3名。合格率0.64%の超難関セレクションとなった。

「試験は1次から4次まで、書類、体力テスト、実際にヨット に乗って、チームワークを見る試験などもありました」



しかし、初めて体験する世界の壁は高か

へ戦いに向かった。

った。カップ獲得の夢は夢のままに終わった・・・。

「アメリカズ・カップではレギュラーになれず、レースにも少ししか出られなかった。クルーになれたことで満足してしまったんですね。僕は『アメリカズ・カップ』に参加していたけど、本当の意味で『ヨット』に乗っていなかった。『ヨット』は、一人一人が一流の『クルー』として同じ目的を目指し自分の役割を果たしていくということ。当時の自分は『受

身の歯車』だったんです」 世界最高峰で戦った一流 選手のみが味わう苦悩。しかし、常に困難に挑戦することで得てきたこの苦しみを、 伊藝はいつもその後の人生 の糧にしてきた。オークランドでのレースが終わった1 週間後にはチーム解散。



伊藝はアメリカズ・カップで味わった悔しさから帰国後、 プロへの転向を決意。仲間と「アルバトロス」というチーム を作り、世界のマッチレースにチャレンジしていった。全日



本優勝5回。初めて『 歯車』が整っていく感 覚を感じることができ た。

セーリングの素 晴らしさを伝えた い

伊藝は現在46歳。 今も現役プロセーラ ーとしてレースへの 出場はもちろんのこと 、セーリングの素晴ら しさを伝えるために多 方面での活躍を続けている。

現在は、国内外のキールボートレース参戦活動だけに 留まらす、沖縄伝来の漁船であるサバニによる和船帆走 技術伝承活動や、世界的にムーブメントが起きているハ イパフォーマンスデインギーモス(水中翼を装備した一人 乗りの高速ヨット)でのヤーリングも行っている。



一方で、セーリングフィールドの普及活動のために、日本ヨットマッチレース協会の会長としてレースの組織化やセーリングイベントなどの立案・企画運営や、セーリングカルチャー普及、発信のため200名を超える規模のイベント「Feelin Ocean」を主催するなど力を注いでいる。

「僕はトップに登り詰めることができなかった。でも、僕がやっているセーリングを見て、若い子たちが『自分もやりたい!』と思ってもらえる存在でありたい。そのためには誰よりも練習し、やっぱりヨットで実績を積み上げなければかっこよくない。その為の努力は今でも継続している自負はあります。2020年に湘南の江ノ島でオリンピック競技が行われる今だからこそ。メディアに取り上げられるような努力をしなくちゃなと。これまでの経験を今度は多くの方へ伝えることで、セーリング全体が発展していけば良いですね」

世界の海へ飽くなき挑戦





伊藝は2015年から世界屈指のレースイベントTP52 Super Seriesに参戦している。しかし、突然解雇が決まることもある。プロとして、また、一家の主として時に迷い、落ち込むこともある。そんなとき支えてくれるのは、高校時代の同級生である妻である。若い頃は一緒にヨットに乗って遊んだ妻。これまでの挑戦を誰より側にいて支えてくれた

唯一無二の存在である。

「最近、テレビを見ている時に子どもを膝の上に抱ってしていると、『父親もこんな気持ちだったのかなー』って思う時があるんですよ。昔は反発ばかりしていましたが、今思えば父は自分に好きなことをやらせてくれていた。僕も子どもには好きなことをしていてほしいですね」

家族に支えられ、ファンに支えられ、伊藝は今日も世界の海へ、飽くなき挑戦を続ける。



6月9日(土) に『湘南VISION大学』授業第2弾! 「Beach Night Picnic @ 湘南海岸〜海のある暮らしをもっと楽しもう!」 を開催しました。

「海辺でピクニック」という海での新しい楽しみ方を提案して、マリンスポーツをしないひとでも海を思いっきり楽しんでもらおうと企画したBeach Night Picnic。史上最速の梅雨入りだった今年ですが、奇跡的な快晴のもと、日が傾きはじめた17時から湘南海岸公園の「平和の像」前で開催しました。

風もなくお天気は最高!なうえに、昨年のプレ講座と比べて人数が多かったからか、トンビの来襲もなく、ゆっくり楽しめました!

当日は鵠沼の鵠沼でリフレクソロジストとして活躍中のprakaash(プラカッシュ)のmichiyoさんの「お家でできるセルフリフレ」講座、湘南台でヨガスタジオ「みんなdeよが」を主宰されているナオミ先生のワンポイントヨガレッスンを同時開催。他にもウクレレやコーヒー、手作り料理などみなさん思い思いの方法でイベントを楽しく盛り上げてくださって、本当に素敵なピクニックになりました。



6月から「ブルーフラッグ」水質調査を 開始しました!

鎌倉市由比ガ浜海水浴場と茅ヶ崎サザンビーチで「ブルーフラッグ」の水質調査を開始しました。分析項目は大腸菌、腸球菌、濁度等。安全できれいなビーチに与えられる国際的な環境認証「ブルーフラッグ」。ブルーフラッグの申請や毎年行われる更新にはこの水質調査の結果が不可欠なんです。

地元由比ガ浜茶亭組合長と監視所のライフセーバーのみなさん、茅ヶ崎のボディボードスクール「サンタートル」にご協力いただいています!(文・片山清宏)









文教大学・三浦市立初声中学校で講義 しました!

6月25日、文教大学国際学部の授業「地域プロジェクト演習」で、「湘南の未来をつくる〜実践から学んだ地域プロジェクト成功の秘訣〜」をテーマに片山理事長が講義を行いました。授業の中では生徒一人ひとりに自分が問題意識を持つ地域課題を考えもらい、具体的な行動計画を全員の前で発表してもらいました。

6月29日、三浦市立初声中学校の「総合的な学習の時間」で中学3年生に片山理事長が授業を行いました。湘南ビジョン研究所の実践活動での成功体験、失敗体験をお話しした上で、SDGs (持続可能な開発目標) について説明し、その中で生徒各自に自分はどんな課題に向き合い何を解決したいのかを考えて発表してもらいました。貴重な機会をいただき、ありがとうございました。

(文·片山清宏)











CINEKOYA

2007年…「シネコヤ」という名前を思いついてから、ちょうど10年になりました。2017年4月、映画と本とパンの店「シネコヤ」はオープンしました。

貸本屋を主体とした新たなスタイルの空間。映画館ではない「シネコヤ」という小さなお店です。パンを食べながら、本を読んだり、映画を楽しんだり、「1日出入り自由」でお出かけしてもOK!途中で街を散策したり、海へ遊びに行ったりと、シネコヤだけでなく街中を1日楽しんでもらいたい、という願いを込めて「1日出入り自由」というシステムにしています。











鵠沼海岸商店街(マリンロード)の通り沿いには、いろいろな商店が並びます。個人店も多く、昔ながらの八百屋さんやお肉屋さん、喫茶店など地元の人たちはもちろん、遠方の人たちにもちょっと楽しいスポットがあります。海に続く道も、夏になるとビーチへの観光客が増えて、南風に乗った潮の香りがワクワクさせてくれるのです。

そんな鵠沼海岸商店街の一角にオープンしたシネコヤは、今年2年目に突入。海の明るい太陽もいいけど、シネコヤのゆったりとした時間も、夏の暑さを忘れさせてくれるひとときになると思います。そんな自分のだけの時間を過ごしに来てください。



●店舗概要

TEL:0466-33-5393

住所: 藤沢市鵠沼海岸3-4-6 営業時間: 9:00~20:00

定休日:木曜日

料金:1日1,500円、年間パスポート15,000円(ともに貸本料)

アクセス: 鵠沼海岸駅より徒歩3分



PUBLISHER: 片山清宏 EDITOR IN CHIEF:森休八郎 ART DIRECTOR:大戸千尋

EDITORIAL STAFF: 片山久美 片山清宏

COVER PHOTO: 芹川明義

web http://shonan-vision.org/

@shonanvision

info@shonan-vision.org